

Monthly Topics 田植え

コナギの除去に大奮戦

鈴木 末一

佐保台小5年生を迎えての田植えは13年目を迎えた。残念なことに今年は、コロナ禍の影響で佐保台っ子は参加できず、会員さんだけの田植えになった。初めてのことだ。担任の先生も何とか取り組めないかと考えられたが、休校続きの授業の遅れを取り戻すために、やむなく体験学習を見送らざるをえなかった。

6月16日(火)、臨時活動日。天気予報どおり、梅雨の晴れ間の田植え日和。メールで呼びかけたのが効を奏したのか、予想を遙かに上回る32人が早朝から続々と集まる。エコGだけではない。まさしく協働活動日となる。

田の水面は緑一色。水草のコナギが繁殖力たくましく根を張る。過去には除草剤を散布しようかと考えた時もあったが、水田への薬剤散布は一切していない。水田の下の池で、近畿大農学部環境管理学科の指導で、奈良県野生絶滅種ベタキンの養殖に取り組んでおり、影響を及ぼしてはならないとの思いだ。



まず北側の水田で、コナギ除草作戦の開始。男女半々の体制。長靴、ソックス、素足と足元はさまざま。一步踏み入ると、ずぶずぶと足首まで泥に沈む。初体験では、なかなか足首が抜けにくい。転ばぬように、ゆっくりと前進。慣れた仲間にはレーキや素手でコナギを引き抜く、バケツに入れる。泥まみれだからバケツ一杯は



重い。これを畦に運んで捨てる、また戻るを繰り返す。徐々に田植えができるように水面が広がる。4条植えの田植え機が到着。北側の水田に移動。待ちかねたように田植え機が着水。見る見るうちに、さよむらさき(黒米)の苗が4条に植わる。続いて南の水田へ。先回りして除草しているが、機械が追いかけるので除草隊はきぜわしい。機械が届かない水田の4隅と畦の際の4辺を手植えしていく。



さよむらさきの苗は例年に比べて立派に育った。背丈は倍近い。杉やヒノキ、松などから抽出

したエキス(天然植物活力液)を初めて使い、育苗を試みた効果だ。作物は苗半作、苗代半作ともいい、苗の育ち具合がよければ栽培は半分成功したようなものといわれる。



子らとの手取り足取りの田植え風景ではなく、大人だけの田植えではあったが、今年の稲作には今まで以上の思い入れが込められているように感じた。学校の授業が軌道に乗れば7月か9月、稲の生育観察、10月には刈り取り、脱穀の収穫体験ができると、5年生は待ち望んでいるようだ。ならやまの実りの秋、元気な子と会員が共に豊作を喜び合える日が訪れるのを祈る。